

日本語指導について

I 日本語指導の実際

1 カリキュラム編成

(1) 日本語の習熟度の測定

生徒に対する指導内容の判断は、日本語指導担当教員、生徒の担任など複数の視点による見取り等を基に校長が行います。入学者選抜時や合格発表後の入学手続などでの生徒とのやりとり等を通じて、日本語習得状況を把握します。また、客観的指標を用いて日本語の習熟度の測定を行うことで、生徒にとってより適切な支援につながるとともに、生徒及び保護者の理解が得やすくなります。

日本語習得状況判断のための客観的指標として用いられる例

- ・日本語能力試験（JLPT）の市販模擬テスト
- ・小学校・中学校の国語の市販模擬テスト
- ・Can-doチェック
国際交流基金「みんなのCan-doサイト」
<<https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>>
- ・「国語学習Can-doリスト」
- ・「高校生のための日本語実力テスト」
- ・「面接試験」

Can-doチェックとは？

生徒が日本語を使ってできる活動の例を「～できる」という形で示した文をCan-doという。これを使って、生徒にできること、できないことを聞いてチェックする。

初めて日本語指導を担う場合は、市販の日本語教材が簡便です。日本語教材は、初級前半、初級後半、中級前半、中級後半のように、対象とする学習者が分かれていることが多いため、その区分に合わせて生徒の日本語の習熟度を判定することができます。判定のために使えるテストには様々なものがありますが、例えば、「高校生のための日本語実力テスト」は、文字・語彙テストと文法・読解テストの二部構成で、日本語能力試験N5（基本的な日本語をある程度理解することができる初級前半レベル）からN2（高校の授業内容を理解できる中上級レベル）の判定が行えるようになっているため、指導方法や内容、教材の判断が容易です。同じく「面接」を合わせて実施することで、生徒の口頭表現能力も測定することができます。

(2) 卒業までの指導計画

複数の教員で協議し、新入生に対して日本語指導が必要と判断した場合は、卒業までの指導計画を立てる必要があります。例えば、1年次に日本語指導の時間を多く確保し、生徒の日本語力を早めに伸ばせるように計画します。1年次には、必修科目が多いため、「特別の教育課程」を編成し、全日制課程の7時間目や定時制課程の0時間目などの時間を加えた個別の指導計画を立て日本語指導の時間を確保するとともに、国語や地理・歴史、公民などでの「取り出し」授業を実施し、「やさしい日本語」による教科指導を通じて日本語を身に付けられるようにするなど、指導の工夫が求められます。入学時に日本語が未習あるいは初級段階の生徒の場合は、1年次の日本語指導だけでは授業内容を理解する日本語が習得できない可能性もあります。その場合には、「入り込み」指導を行うとともに、2年次以降も「特別の教育課程」による個別の日本語指導や、学校設定教科・科目により日本語指導を継続できるようにします。

3年間の指導計画の例

【1年次】

3単位「特別の教育課程」（入学直後の集中指導（1単位）＋2単位分の日本語指導）に加えて国語の「取り出し」授業を実施する。

【2年次】

「特別の教育課程」により国語の週2単位を日本語指導に充て、学校設定科目で「日本語」2単位を用意し、週4単位の日本語指導を実施する。

【3年次】

学校設定科目で「日本語」2単位を用意し、日本語指導を実施する

(3) 日本語指導の教育内容の検討

ア 「特別の教育課程」

日本語指導が必要な生徒に対し、個別の指導計画に従って日本語の能力に応じた特別の指導を行います。個別に設定された指導目標からみて、その成果が満足できると認められる場合には、単位を修得したことを認定します。「特別の教育課程」の編成・実施の判断は各学校の校長が行います。

通常のエデュケーションに加えるか、エデュケーションの一部に替えて実施するか、又はその両方を組み合わせて実施します。ただし、学習指導要領に定める必修科目など一部の教科は替えることができません。指導形態も、週時程に組み込んだり、入学直後や長期休業中に集中的に行ったりするなど、柔軟なエデュケーションの編成を行うことができます。

指導内容は日本語指導だけでなく、各教科等の授業への参画を目指すものや、社会参画意識形成を目指すものなど、幅広い内容を扱うことができます。

都立高等学校等では、「特別の教育課程」を実施する場合は、「日本語指導コーディネーター」を各課程1名指名でき、この「日本語指導コーディネーター」が個別の指導計画の作成や校内外の調整などの中心的な役割を果たします。直接の指導を行う「日本語指導担当教員」と日本語指導に係る外部人材である「日本語指導支援員」とで当該生徒に対して指導を行うこともできます。

イ 教科の「取り出し」授業

各教科の各科目において、習熟度別授業を展開し、日本語指導が必要な生徒等に対して指導を行います。「やさしい日本語」を用いたり、ルビ付きの教材を用いたりするなど、当該生徒が各教科・各科目の学習指導要領の目標を達成できるように教科指導を行います。各教科・各科目の目標に合わせて観点別学習状況の評価を行い、修得が認められる場合には各教科・科目の単位認定を行います。

ウ 授業への「入り込み」指導

各教科の各科目において、通常のエデュケーションの授業内で日本語指導が必要な生徒に対し、母語話者などが支援を行います。

エ 学校設定教科・科目の設置

各学校の目標に合わせて、学習指導要領で示されていない教科や科目を設定して教育課程を編成し指導を行います。学校設定科目については、学習指導要領に示されている教科の科目として設定する場合は、その教科の目標に準拠した目標を設定します。

各教科・各科目の目標に合わせて教員が指導を行い、観点別学習状況の評価を行います。目標に合わせて修得が認められる場合には、当該の学校設定教科・科目の単位認定を行います。

オ その他の支援

全日制課程の7時間目や定時制課程の0時間目などに、日本語指導が必要な生徒に対して日本語指導や教科指導の補習を行います。長期休業中などに集中的に補習を行うことなども考えられます。

また、NPOなど外部の機関が行っている「日本語教室」などを紹介することも考えられます。

(4) 教材

■初級

初級レベルの総合日本語教材には様々なものがありますが、読解と文章表現課題を多く含む教材を採用すると指導が容易です。教科学習には、特に「読む」、「書く」技能が重要となります。日本で生活して学校に通う生徒の場合、「聞く」、「話す」力は、日々の生活を通して向上していきますが、「読む」、「書く」力を高めるためには学習が必要です。

日本語の習熟度の測定のための面接試験を実施する際など、これまで使用した教材を生徒から聞き取り、既習の教材との重複を避けます。

■中級

中級レベルの総合日本語教材は、理科や社会など教科学習に関連のあるテーマを読解素材に多く扱うものを採用することが考えられます。教科学習に必要な語を学ぶことができ、教科学習で扱われるテーマに親しむことができるなどメリットがあります。読解、文章表現に特化した教科書も、扱うテーマを生徒に合ったものにとすると、生徒の学習意欲の向上につながります。

■漢字

漢字は教科学習に欠かせないため、漢字学習に特化した教材を別途用意することが考えられます。授業では、漢字指導のための時間が十分に確保できないため、教材選定の際には、練習が豊富に用意され自習に向いているか、学習アプリなどの付属教材等、自学自習しやすい内容かなどの観点で検討します。

■国語教科書のリライト教材等

リライト教材とは、学年相当の国語の教科書の読み物を「やさしい日本語」に書き換え、生徒がテキストの内容を理解できるようにしたものです。難しい語を抜き出して、生徒の母語や英語の訳をつけた語彙リストを用意するなどの工夫も考えられます。

用意する教材

初級前半	初級後半	中級前半	中級後半以降
(1) 初級レベルの総合日本語教材 ＊「初級1」「初級2」のように2分冊になっていることが多い。 ＊「読む」「書く」活動の充実したもの (2) 初級レベルの漢字教科書		(1) 中級レベルの総合日本語教材 ＊読解や文章表現に特化した教材でも可 (2) 中級レベルの漢字教科書	学年相当の国語教科書のリライト教材から国語の教科書へ ＊必要に応じてルビ振りや語彙リストを用意

(5) 組織的な指導

ア 授業運営

「特別の教育課程」による指導、国語の「取り出し」授業、学校設定教科・科目などを組み合わせて日本語指導を行う場合、複数の授業担当者がチームを組むなどして組織的に指導に当たることになります。まずは、メンバー間で指導の目的を確認し、各自の役割や基本方針を明確にしておく必要があります。

イ 評価

「特別の教育課程」による指導の評価方法、国語の「取り出し」授業の観点別学習状況の評価方法等について、担当する全ての教員が事前に共有する必要があります。学校設定教科・科目による日本語指導の場合、当該教科・科目の目標に準拠して評価します。いずれも、学校として評価の方針を決定しておきます。

また、日本語指導におけるアセスメントは、各生徒の日本語の習熟度を適切に把握し、指導形態の施行時期を適切に判断するために行う側面もあります。定期考査の結果だけでは、授業に参加できる日本語力があると判断するには不十分です。生徒が授業中に書いた作文、スピーチの録音なども学習ポートフォリオとして残しておきます。「高校生のための日本語実力テスト」等を活用し、一定の習熟度(N2レベルなど)に達していれば「取り出し」授業を終了するなど、指導形態の移行を検討する際の材料とします。

指導形態の移行後、「入り込み」指導を含め、どのような支援ができるのかを併せて決めておくとともに、生徒自身が困難を訴えた場合には、柔軟に「取り出し」授業等に切り替えられるよう日本語指導担当者だけでなく、ホームルーム担任、他の科目の担当者など複数の教員で多面的に検討しておきます。

(6) クラス編成

「特別の教育課程」による日本語指導は、個別の指導計画に沿って行われるため、個別指導が基本となりますが、学校設定教科・科目での指導や、「取り出し」授業で初級から中級前半までの指導を終えるためには、できるだけ生徒の日本語の習熟度を揃えておく効果的です。日本語指導のクラスで、異なる習熟度の生徒に教員一人に対応した場合、生徒の日本語力が伸びず、2年次にも「取り出し」授業を継続せざるを得なくなることが考えられます。入学時の日本語レベルの測定結果を学級編成にも生かし、同じ日本語の習熟度の生徒が同じ曜日・時限に共に学べるようにするなどの工夫を行います。

(7) 学校設定教科・科目による日本語指導

2年次、3年次に、学校設定教科・科目の時間を利用して日本語指導を継続する場合は、「読む力」と「書く力」を伸ばすことを目標とし、日本語教材を選定します。中級レベルからは、日本社会や科学をテーマとした読解教材も多く市販されており、読解技術の向上だけでなく教科学習に関わる知識の獲得も目指すことができます。大学進学を希望している生徒の場合は、小論文試験を受ける可能性もあるため、生徒の希望する進路や興味に合わせて日本語学習者のためのアカデミック・ライティングや論文作成の教科書を選ぶことなどが考えられます。多くは上級レベルの学習者を想定していますが、中級後半レベルに差し掛かった学習者であれば使用できるものもあります。

また、日本語指導の時間に日本語教材を使わずに、プロジェクトワークなどを行うことも考えられ、生徒の母語を積極的に活用した調査、国際交流イベントや学校行事とのコラボレーションなど、学校の実情に合わせた活動を計画します。

II 教室環境整備

日本語指導を行う場合に必要になるのが「教室」です。生徒を受け入れるに当たって、生徒が安心して学習できるよう環境を事前に整えておく必要があります。日本語指導を行う教室「日本語教室」の設置場所や方法、必要な設備・備品等を、あらかじめ把握し早めに検討しておくことが重要です。

1 日本語教室の選定

日本語教室を設置するに当たって、教室の広さや数、授業担当者用のスペースの有無を検討します。

- ・同じ時間に「日本語教室」で指導を受ける生徒の人数
- ・外部人材に授業担当を依頼する場合の同じ時間に来校する授業担当者の人数

以下のポイントを踏まえて、空き教室等を候補に検討

- ①教室の広さ
- ②日本語指導担当者用スペース
- ③教室の場所
- ④備え付けられている設備

(1) 教室の広さ

同じ時間に日本語教室で学習する生徒の人数や指導形態を想定して、教室の広さと数を検討します。クラスを分ける可能性があることや次年度以降の入学生のために教室を拡充する可能性があることも念頭におきます。

(2) 教室の場所

職員室に近い部屋を選ぶことで、生徒と教員が会う機会や、短い会話をかわす機会ができます。生徒との関係構築へとつながり、生徒にとっては高校生活の安心につながります。

日本語指導担当者用スペースだけでも職員室の近く又は職員室内に配置することができると、双方の負担の軽減につながることが期待できます。

2 日本語教室の設備・備品

日本語がまだ十分に習得できていない段階の生徒にとって、日本語教室での授業は境遇の近い生徒と交流したり、日本語指導担当者との対話したりできる貴重な時間となります。不安や葛藤を抱える生徒にとって、安心して自己開示ができる「居場所」となるよう、指導に関わる者が一体となって教室を作り上げていきます。

(1) 日本語教室に必要な設備・備品

日本語教室や日本語指導担当者スペースに必要な設備や備品、教材等は、以下のとおりです。

日本語教室の設備・備品の例

必要なもの…◎ あった方がよいもの…○

設備・備品	
黒板又はホワイトボード	◎
時計	◎
教卓	◎
生徒用の机・椅子	◎
掲示板(生徒への連絡・成果物の掲示用) (ホワイトボードなどで代用可)	◎
プロジェクター	○
タブレットパソコン	○
世界地図	○
日本地図	○
ファイルボックス(教材等整理用)	○
生徒が自由に読める本 (やさしい日本語で書かれた物語等)	○

配置をアレンジして様々な授業活動が行えるように動かしやすいもの

提出物の内容と期日、テスト日程や範囲、時程表を掲示する。

生徒との会話、関係構築のために世界地図などがあると良い。

日本語学習者向けのやさしいレベルの本の中から、読みたいと思う本を自分で選び、辞書を使わずにたくさん読むこと(多読)は、語彙の習得や漢字への苦手意識の軽減等様々な効果がある。生徒が自由に手に取れるよう、配架できるとよい。

(2) 日本語指導担当者に必要な設備・備品

ア 教材・教具

生徒の日本語の習熟度や日本語指導担当者の指導方法により必要な教材・教具は異なるため、日本語指導担当者と適宜相談の上、充実していきます。

イ 授業管理

授業の運営に合わせて必要なものを準備すると効果的です。チームティーチングの場合は指導計画表等も併せて整理しておくとう便利です。

日本語教室の設備・備品の例

必要なもの…◎ あった方がよいもの…○

	設備・備品	
【教材・教具】	授業担当者用の机・椅子	◎
	コピー機（及びトナー）	○
	その他 ・CDプレイヤー ・市販の日本語学習教材 ・小・中・高の国語教科書 ・各教科の教科書 ・作文用紙 ・模造紙 ・画用紙 ・マジック ・棚 ・ひらがな／カタカナ／漢字表 ・各種カード ・文学作品のマンガ本 ・文学作品の英語の本 ・生徒の母国に関する本、母国語で書かれた本	指導内容により必要になる可能性がある
【授業管理】	「授業記録」	○
	「成果物」保管用ファイル	○
	「指導計画表」等	○

3 関係者間の連携のために必要な備品

日本語指導の関係者との連携において、必要な書類の受渡しやお知らせの配布といった業務連絡と、生徒の学校生活等に関する情報交換が必要となります。日本語指導担当者が校内で立ち寄る場所やオンラインツールを利用して、円滑に進めます。

連携のために必要な備品の例

- | |
|---|
| ①業務連絡ツール
(オンライン情報共有ツール、ホワイトボード、バインダーファイル、ノート等) |
| ②書類などの受渡しツール
(鍵付きの引き出し、またはボックス等) |
| ③生徒に関する情報交換ツール
(オンライン情報共有ツール、ノート) |

① 業務連絡ツール

連絡内容に応じてツールを選択すると効果的です。オンライン情報共有ツールを使用すれば、即時に情報共有ができコメント等も可能になるため、導入を検討します。また、以下の情報は日本語指導担当者用のスペースに掲示しておく、必要なときにいつでも確認できます。

・年間行事予定表 ・職員室の座席表 ・日本語指導の時間割と担当者 ・各クラスの時間割

② 書類などの受渡しツール

日本語指導担当者とは、テストや書類などを受け渡しする場合があります。鍵付きの引き出しや暗証番号付きのボックス等を活用することも、あらかじめ検討しておく必要があります。個人情報の取扱いは各学校の規定や方法を踏まえるとともに、管理職の指導の下で管理の徹底を図ります。

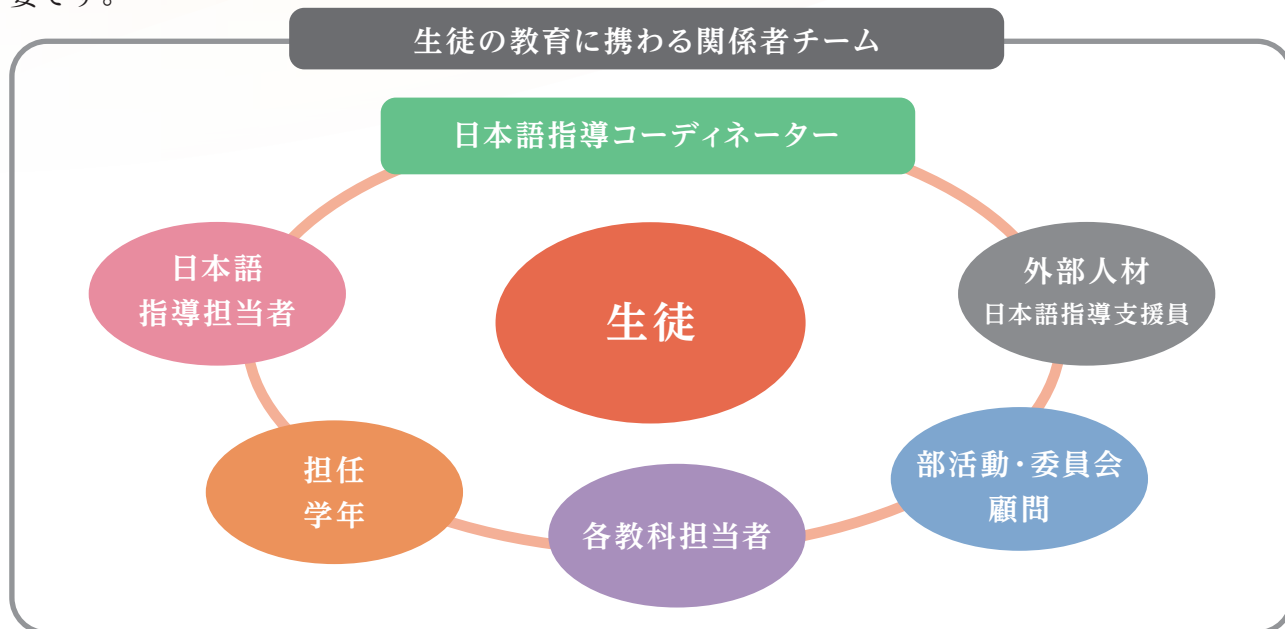
③ 生徒に関する情報交換ツール

生徒に関する情報の連絡は、生徒別又は連絡の必要な項目別にフォーマットを作成し、オンラインの情報共有ツール等を活用して情報を共有します。

個人情報を取り扱う場合は、各学校の規定や方法を踏まえるとともに、管理職の指導の下で管理の徹底を図ります。

III 組織的な指導

一人の生徒の教育に携わる関係者は、担任及び学年の教員、各教科の担当教員、部活動や委員会の顧問などが考えられます。日本語指導が必要な生徒は、これらに加え、「日本語指導担当教員」、「日本語指導コーディネーター」、「日本語指導支援員」等も加わるため、情報の共有が重要です。



1 指導計画の共有

「特別の教育課程」を編成・実施する場合は、「個別の指導計画」を作成することになりますが、それ以外の外国につながる生徒についても学習進捗状況を関係者間で把握するため、指導計画を作成することは有効です。指導計画の大枠は、「日本語指導コーディネーター」が定めると効果的です。

2 授業の記録と共有

「特別の教育課程」を編成・実施する場合、「個別の指導計画」を作成し、「生徒に関する記録」と「指導に関する記録」を作成することとなります。他の生徒についても、今後の日本語指導の在り方を考える貴重な材料になるため、例えば、次の3点を踏まえ記録をすることが望まれます。

(1) 授業内容

予定していた内容と実施した内容を記録します。

(2) 生徒の理解状況

生徒がどの程度理解できたかを記録します。

(3) 生徒の情報

日本語指導担当者が授業内で知り得た生徒情報を記載します。

授業記録の例

○○ ○○ (授業名) 授業報告 月 日 () 時間目 教室: 授業担当者:			
クラス	生徒名	進度	出席・欠席・遅刻
		☐ スケジュールどおり ☐ 遅れ・変更有	出・欠・遅 (分)
		☐ スケジュールどおり ☐ 遅れ・変更有	出・欠・遅 (分)
		☐ スケジュールどおり ☐ 遅れ・変更有	出・欠・遅 (分)
		☐ スケジュールどおり ☐ 遅れ・変更有	出・欠・遅 (分)
(1) 授業内容・引継ぎ事項			
例) トピック1「教室」 1) ~へ／に…行きます／来ます／帰ります ①会話文 (p.○) の範読→学習文型を使った例文を提示 ②学習文型の意味を確認 ③口頭でドリル練習 ④書く練習 (p.○の練習問題使用) ⑤タスクによるアウトプット練習 ※『○△活動集』p.○のタスクを使用			
(2) 生徒の理解状況 (理解していたこと・理解していなかったこと)			
例) - 理由を尋ねられたとき、「～ので…です」という言い方で回答する方法を学習しました。どんなシチュエーションでも上手に対応できました。 - 本文で述べられている「行雲流水」という日本独特の価値観がよくわからなかったようです。 - 母語の影響か、清音と濁音の区別が苦手なようです。発音だけでなく、書くときにも間違いが多く見られます。 - 絵がとても上手で驚きました。日本語作文集の表紙のイラストを描いてくれました。			
(3) 生徒の情報 (日本語学習外の授業、他教科での指導)			
例) ○○の授業についていけず、投げやりになっているようです。板書のスピードが速くて書き取れないそうです。			

3 成果物の保管・共有

授業中の活動で生徒が書いた作文やポスター等の発表資料などの成果物を、生徒が自ら整理してポートフォリオを作成したり、日本語指導担当者側が集めたりします。学期途中や年度開始前に指導形態を検討するに当たって、これらの成果物が判断材料の一つになります。生徒の教育に携わる関係者間で、いつでも閲覧が可能な形態で保管しておくことが考えられます。

4 オンラインツールの活用（情報共有方法）

オンラインツールを使用すれば、情報共有がより迅速かつ効率的に行えます。特に、日本語指導関係者が複数いる場合、オンライン会議などで、一斉に打ち合わせする機会を設けることなども有効です。ただし、個人情報の取扱いについては学校の規定や管理職の指導に従います。

例1) 学期に1回程度、日本語指導担当者間で実施

授業内容やカリキュラムの振り返り、各自が疑問に感じていることの相談、今後の授業方針の決定等

例2) 月1回～学期に1回程度、生徒の教育に携わる関係者チーム全体で実施

日本語と教科の指導内容の確認、研修会開催の提案や相談等、学校全体で対応することなど

5 教室で使用する用語

(1) 「やさしい日本語」

「やさしい日本語」とは、単語や文の構造を簡単にし、必要に応じて説明を加えるなどした、普通の日本語よりも簡単で、外国人にも分かりやすい日本語です。

「やさしい日本語」

日本語指導が必要な生徒が在籍する各学校においては、ゆっくりはっきり話す、絵や図などを活用する、ワークシートを活用するなど、生徒の状況に応じた支援を行っていることと思います。

指導の工夫のひとつとして、「やさしい日本語」を効果的に活用してみませんか。

※「やさしい日本語」とは、単語や文の構造を簡単にし、必要に応じて説明を加えるなどした、普通の日本語よりも簡単で、外国人にも分かりやすい日本語のことです。



イメージキャラクター
「やさカニくん」

◆教科指導における「やさしい日本語」の考え方

伝えるべきことは何かを考え、生徒にとって必要な情報のみを選択して伝えたり、必要に応じて補足説明をしたりする。

「やさしい日本語」の作り方 ～文の構造に関するポイント～

1 一つの文を短くし、簡単な構造にする（主語と述語を明確にする。）

例 「〇〇であり、▲▲なので、…」⇒「〇〇です。▲▲です。だから、…」

2 文末はできるだけ統一する。

例 「です」「ます」「してください」形に統一する。

3 二重否定は使わない。

例 「食べないわけではないです」⇒「^た食べます」

4 「動詞を名詞化したもの」+「あった」などの文は、できるだけもとの動詞で終わる文にする。

例 「水漏れがあった」⇒「^{みず}^ち水が漏れた」

5 文節で区切って余白を入れ、「分かち書き」にする。（特に全文ひらがなの場合）

例 「もういちどがっこうにきてください」⇒「もう一度 学校に 来て ください」

※ 分かち書き：文章において、ことばの区切りに空白を入れる書き方
「ね」や「さ」を入れても不自然な文章にならないところに、スペースを入れる。

伝え方の工夫

- 身振り手振りで示し、ゆっくりはっきり話す。
- 文字で伝えるときは、読みやすい書体にする。
- 絵・写真・図を入れたり、実物を見せたりする。

「やさしい日本語」の作り方 ～語彙・表現に関するポイント～

1 難しい言葉は、簡単な語彙に言い換える。

例 今朝 → 今朝^{きょう} 朝^{あさ}

例 給食 → 給^{きゅう} 食^{しょく} <= 学校^{がっこう}で 食べる^た ごはん>

※ただし、災害用語や日常生活でよく使うことばなど、知っておくとよいことばはそのまま使い、ことばの後に説明を加える。

2 曖昧な表現は使わない。

例 「おそらく」「たぶん」「思われます」などは避ける。

3 漢字にはルビ（ふりがな）をつける。

例 「給^{きゅう}食^{しょく}」「給食（きゅうしょく）」

4 発音や意味が原語と異なる場合があるので、カタカナ外来語はできるだけ使用しない。また、ローマ字もできるだけ使用しない。

例 「アシスタント」→「手^て伝^{つた}ってくれる人^{ひと}」

※ただし、日常的に使われる単語や、他の単語で言い換えられないものは、そのまま使う。（「ラジオ」、「テレビ」など）

5 擬態語（「めちゃめちゃ」、「ふらふら」等）や擬音語（「ゴロゴロ」等）は使わない。

例 「ふらふらです」→「疲^{つか}れています」

やさしい日本語を使う際には、相手によって、伝える内容、語彙や表現などを柔軟に調節する必要があります。それぞれの生徒がもっている日本語能力や日本の文化習慣・地理・社会等についての知識が異なるため、その生徒にとって必要な情報は何かを考えながら伝えていくことが大切です。

◆「やさしい日本語」の参考サイト

- 文化庁 在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン掲載

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/92484001.html



- 東京都多文化共生ポータルサイト（東京都つながり創生財団）

やさしい日本語普及啓発に係る情報多数掲載

<https://tabunka.tokyo-tsunagari.or.jp/yasanichi.html>



- 東京都生活文化スポーツ局 やさしい日本語に関する動画多数掲載

https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/chiiki_tabunka/tabunka/tabunkasuishin/0000001389.html



(2) 用語の統一

日本語指導では、担当者が生徒の日本語の習熟度に合わせ、授業中に使用する日本語の難易度を調整します。特に、初級段階の日本語指導では、使用する日本語に細心の注意を払う必要があります。教室で使用する基本的な用語は日本語指導担当者間で統一します。さらに、他の授業においても同様の用語を使用するよう、共通理解を図る必要があります。

基本的な用語の例

☐ 名詞の統一

例：氏名→名前、試験・考査→テスト、課題→宿題、職員室→先生の部屋…等

☐ 生徒への指示（短く、はっきり言い切る）

例：（授業を）始めます、終わります 聞いてください、見てください、書いてください、
言ってください、もう一度お願いします
（プリントや宿題を）出してください （教室や職員室に）来てください

☐ 生徒にフィードバックをするとき

例：いいです／だめです （^{えん}婉曲的な注意は理解されない場合がある）

IV 日本語指導の方法

1 学期・月単位での予定の立案

「日本語指導コーディネーター」等は、生徒の日本語レベルに沿った年間目標を設定した上で、日本語指導の個別指導計画を立てます。市販の教材を使用する場合は、扱う箇所やペースなど、大まかな予定を組みます。その後、学期・月単位での進捗へと落とし込みます。予定の立て方の流れは次のとおりです。

(1) 年間の授業数確認

例：1年間で70単位時間（「特別の教育課程」で2単位）

35単位時間を入学直後に集中的に指導、35単位時間を週時程に位置付けて指導
入学直後の指導は「サバイバル日本語」（学校生活で日常的に使う言葉）と「日本語基礎」を行い、週時程に位置付けた指導は、前半15単位時間を日本語基礎固め、後半20単位時間を教科との統合学習に割り当てる、等

(2) 使用教材の一单元当たり必要な時間数を確認

教材の前書きに記載されている学習時間の目安などを参考に、一单元に何単位時間必要か確認します。

(3) 年間の学習計画を決定

教材を必ず全部使う必要はありません。扱わないテーマや場面、活動を判断する基準例は次のとおりです。

- ・ 高校生には適さないテーマ（ビジネスや育児に関連するテーマ、他）
- ・ 対象クラスの生徒には必要ない場面（簡単な買い物や観光の場面、他）
- ・ 高校生活を送るに当たって、必ずしも急いで習得する必要はない文型（敬語、他）
- ・ 対象クラスでは行いにくい活動

(4) 学期又は定期考査・月単位での進捗を決定

学期単位や月単位で、実施する单元を決め、日本語の授業担当者に具体的な授業計画の立案作成を依頼します。

指導時期	教材	
	教材『はじめてのにほんご〇△』	教材『〇△にほんご』
入学直後	1,3,4,5,6,8,9,10	-
1学期末まで	11,13	1,2,4
2学期中間まで	14	5,6,7
2学期末まで	-	8,10,11,12,14
学年末まで	-	16,19

【指導計画表の効果的な活用】

チームで組織的に指導をする場合は、円滑な授業運営のため、学期又は定期考査・月単位での進度を基にした時間ごとの詳細な進度計画表があると、授業の引継ぎもしやすくなり便利です。詳細な指導計画表は、日本語授業の担当者が適宜作成します。

指導計画表に含める項目の例として、次の①～④が挙げられます。

- ①通し番号（指導計画を1時間ずつ設定する際に、便宜上割り振った番号）
- ②教材名・単元・該当指導項目やページ数
- ③その時間の目標
- ④指導に当たっての注意事項等

指導計画表の例（初級クラスの一部）

通し番号	単元	1時間の授業内容 教科書：『○○○にほんご初級』	授業目標	備考
初級22	4	「私の国・町」 ・テーマ導入 (p.○)	自分の国や町のどこにあり、日本までどれくらい時間がかかるかを説明したり、相手に質問をしたりすることができる。	副教材 (p.○-○) 語彙問題
初級23	4	・聴解問題 (p.○) ・練習問題 (p.○-○)		
初級24	4	・練習問題 ・タスク		副教材 (p.○-○) 練習問題
初級25	4	・読解問題 ・語彙の復習		
初級26	4	・作文タスク		宿題：インタビュー活動
初級27	4	・小テスト ・作文返却、清書→提出		

指導計画表の例（中級クラスの一部）

通し番号	単元	1時間の授業内容 教科書：『○○○にほんご初級』	授業目標	備考
中級1	1	・テーマ導入 ・新出語彙の確認 ・本文範読、段落分け ・本文問い：口頭で確認 ・本文漢字：読みを確認	・本文のテーマについてイメージをつかむことができる ・本文の大体の内容が理解できる。 ・新しい語彙を覚える。	翻訳版語彙リストを活用
中級2	1	・本文漢字：1段落読みと書き ・本文（1段落）音読 ・文法問題 A、B	・本文で使われる文法の意味を理解し、その文型を用いて正しく文を作成することができる。 ・新出漢字の読み書きができる。	
中級3	1	・本文漢字：2段落読みと書き ・本文（2段落）音読 ・文法問題 C、D	同上	
中級4	1	・本文漢字：3段落読みと書き ・本文（3段落）音読 ・本文問い：筆記で解答 ・本文精読：接続詞、指示語の確認	・新出漢字の読み書きができる。	・本文問いは教科書の余白またはノート、プリントに簡潔に書き、その場で添削する。

中級5	1	・本文(1～3段落)ルビなし音読 ・発展問題:自由発話 ・本文要約:口頭で確認後、書いてまとめる ・作文:他の生徒との話し合いの後、二つのうち好きな方のテーマを選び、アウトラインのヒントに沿って作文。(200字程度)→提出	・設問に正しい形で解答することができる。 ・ヒントを使って、簡単に本文の要約ができる。 ・アウトラインのヒントを使って、自分の意見や感想を200字程度で書ける。	・要約はノート、プリントに簡潔に書き、その場で添削する。 ・作文は罫線横書きで行う。
中級6	1	・小テスト ・作文返却、清書→提出		

2 生徒に配布する予定表

授業担当者が用いる指導計画を基に、生徒に配布する個別の進度予定表(月ごと又は学期ごと)を作成して配布すると効果的です。自律学習ができるようにするためには、学習計画を把握して学習を進めるという習慣付けを支援する必要があります。次の授業までの予習内容、課題の提出期限、小テスト等に備えての復習方法など、予定表があれば、それを基に生徒自身が主体的に学習に取り組むことができます。生徒に対して予定表の使い方を説明し、意義を理解させた上で配布することが望まれます。

個別の進度予定表の例

1年A組○○○○さん 4月の予定表

日付	時限	通し番号	授業内容		予習・宿題
			単元	教材:『はじめてにほんご△△□』	
4/8(月)	1～4	初級1・2 初級3・4	1	<せいかつ> ・あいさつ ・けんこう	
4/9(火)	1～4	初級5・6 初級7・8	2	<せいかつ> ・あんぜん ・がっこう	

1年B組○○○○さん 4月の予定表

日付	時限	通し番号	授業内容		予習・宿題
			単元	教材:『△△□にほんご』	
4/8(月)	2	中級1	1	<思いやり> ・テーマについて話す(p.○) ・新出語彙の学習(p.○) ・本文(p.○)通し読み	p.2の質問について、授業までに考えておく
4/9(火)	3	中級2	1	【1・2段落】 ・漢字学習 ・本文音読 ・文法問題①(p.○)	
4/10(水)	1	中級3	1	【3段落】 ・漢字学習 ・本文音読 ・文法問題②(p.○)	
4/12(金)	4	中級4	1	【1～3段落】 ・本文精読 ・読解問題(p.○)	
4/15(月)	2	中級5	2	・本文要旨の作成 ・作文タスク	授業中に作文が終わらなければ、宿題とする。 (提出:小テストの日まで)
4/17(水)	1	中級6	2	小テスト	

【参考：指導計画一覧】

一人の生徒に対して複数の日本語授業担当者が指導を分担する場合、指導計画一覧を作成しておく、各担当者の指導担当箇所や各生徒の進捗状況が関係者チーム全体で把握できます。

「取り出し」授業の場合、クラスが多いと時間割が複雑になり、進度の調整も大変になります。また、一つのクラス内に異なる習熟度の生徒が混在すると、授業担当者を習熟度に合わせて同時時間帯に複数名配置したり、一つのクラス内で1人の担当者が異なる内容の授業を同時に進行したりするなど、指導する側にとっても負担が大きくなります。

指導計画表一覧の例

日付	曜日	担当	1組		2組		3組		4組		5組
			Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん	Iさん
7月11日	月	〇			初級40	中級45					
7月11日	月	〇									初級75
7月11日	月	〇							中級44	中級44	
7月11日	月	〇					中級43	中級43			
7月11日	月	〇	中級44	初級40			中級44	中級44			
7月12日	火	〇									初級76
7月12日	火	〇	中級45	初級41							
7月13日	水	〇			初級41	中級46	中級46	中級46			
7月13日	水	〇					中級45	中級45	中級45	中級45	
7月13日	水	〇							中級46	中級46	初級77

教室内の活動

(1) 教室内の活動の流れ

日本語の授業では、一般的に次のような流れで教室内の活動を進めていきます。

【初級の指導(文型シラバス)を行う授業の場合(例)】

①学習項目の提示

例) 教材の本文会話から「～たことがあります(経験)」に注目

- ・私はアメリカへ行ったことがあります。
- ・私は新幹線に乗ったことがあります。
- ・私は雪を見たことはありません。…等

②意味や機能の確認

例) 複数の例文の提示、絵や母語を活用→意味や機能を確認

③接続方法の確認&パターンプラクティス

例) 動詞の「た形」が入ることを確認→動詞のキューを与えて「～たことがあります」の型が身に付くよう繰り返し練習、他

④本文会話の中での使い方を確認

例) 本文会話を使って会話練習(疑問形や答え方も確認)

教師: 食べます
生徒: 食べたことがあります
教師: 行きます
生徒: 行ったことがあります
……

⑤タスク活動

例) クラス全体で、様々な経験を表すイラストや単語を入れたビンゴゲームをしながら、会話練習を行う。

納豆	UFO	JLPT
花見	富士山	遅刻
カラオケ	馬	相撲

生徒A: Bさん、納豆を食べたことがありますか。
生徒B: はい、あります。
生徒A: そうですか。おいしかったですか。
生徒B: いいえ、まずかったです…。
生徒A: そうですか。私は大好きですよ。
生徒A: Cさん、富士山に登ったことがありますか。
生徒C: いいえ、ありません。いつか登りたいです。

Web上で検索すると、タスク活動のヒントになる数多くの書籍やWebサイトを見付けることができます。上手に活用し、導入した文型をアウトプットできるよう、授業を組み立てます。

様々なルーツをもつ生徒が集まっている場合、母語や文化のインフォメーションギャップを利用した有意義なインタビュータスクを行うことができます。また、アウトプットの活動を通して、母文化を他者に紹介する機会も得られます。

一方、中級以上の総合日本語教材は、会話形式ではなく、ある程度まとまった長さの文章を本文としている場合があります。本文中の文型学習のみならず、読解問題、本文の内容を更に深く考え議論するための問題提起、本文要約や作文につなげるためのヒントが掲載されていることもあります。

本文のテーマは、日本事情のみならず、環境、医療等、共通性の高い課題を扱っています。生徒が母国と日本の違いや共通点を考え、日本語で自分の考えを発信できる機会を可能な限り多く設けることが望めます。

【中級の授業の場合(例)】

①テーマの導入・自由会話

例) テーマ:「インターネットと個人情報」

→1日にどのくらいネットを使うか? 個人情報にはどんなものがあるか?…等

②本文で使われる新出語彙の導入・意味の確認

例) 財産、戸籍、遺伝子、管理する…等

- ・市販の教材には、数か国語の翻訳を付した語彙リストが付属しているものもある
- ・動詞は、一緒に使う助詞もセットで導入する
- ・生徒の状況に応じて、類義語や対義語も導入する

③本文の範読、大意の確認

- ・教師の範読又はCDを利用して本文を通して聞く
- ・本文全体の○×問題を解く…等

④1段落ずつ学習

- ・難しい文型や表現・漢字を取り上げる
- ・精読する

難しい文法については、意味の説明や練習問題を収載している教材が多い

⑤読解問題・本文の音読

- ・解答の根拠になる本文の箇所を確認する
- ・本文全体を既習漢字のルビを外して音読する

⑥発展課題・ディスカッション等

- ・本文の要旨を書く
- ・グループ内でディスカッションをする(例: インターネットの利用の在り方について、個人情報保護について、等)

⑦テーマに沿った作文を書く

例) 高校生とインターネットの付き合い方、インターネットの今後

- ・作文の基本的な書き方、原稿用紙の使い方は別途指導する
- ・作文の字数は生徒の日本語の習熟度によって調整する
- ・1年を通して徐々に長く書けるように計画する

一般的な日本語教材を使用するとしても、日本語の習熟度の違いを問わず、高校生活へのつながりを常に意識することが大切です。高校生にとって身近な話題や例文を提示したり、国語学習を意識して本文を精読したり、「取り出し」授業をしていない教科で扱っているテーマや語彙を取り上げたりする等、様々な工夫が可能です。

(2) 様々な教室内の活動

日常生活・高校生活の中で自然に力が付きやすい「話す」「聞く」活動よりも、「読む」「書く」活動を多く行うことが望めます。また、教科学習につながりやすく、応用できる教室活動として、例えば、次のような活動が考えられます。

- ・語彙の学習：語彙マップの作成、ディクテーション練習
- ・漢字の学習：漢字カードやアプリゲームの活用、定期的な小テストの実施
- ・読解力の向上：音読活動、再話活動（これらの活動を行うことで、意味のまとまりの理解に加え、正しい発音やイントネーション、語彙の理解度や漢字の習得状況も確認できる。）
- ・プロジェクトワーク：
母語も使用して調べたことをまとめ、日本語でポスターを作成・発表する
- ・インフォメーションギャップを利用したインタビュー：
多様な母語を持つグループで、他の生徒に各国事情について等のインタビューを行う

3 宿題

宿題は、学習の効果を高めるためには重要です。しかし、宿題を課すことを前提に日本語の学習を進めると、生徒の負担が大きいため、必要最低限の量で検討します。

文法ドリルや漢字練習等の宿題だけでなく、高校生活や教科学習につながるよう、次のような宿題を課すことも有益です。

日本語授業における宿題の例

① クラスとつながる宿題

例) 日本語授業で学習したテーマについて、所属クラスにアンケートをする

② 教科学習につながる宿題

例) 「取り出し」授業の科目の通常クラスの考査問題を解く

③ 日本語の基礎力を底上げする宿題

例) 読書や日記を課す、母語で読書した内容を日本語で紹介する

どのような宿題を課すにせよ、提出期限や、宿題の提出が成績にどの程度反映するか、生徒に事前に説明します。日本語の授業でも、宿題（＝提出物）の大切さを生徒にしっかり伝え、確実に提出する習慣付けを支援します。

4 自律学習の支援

(1) 自律学習の重要性

生徒は慣れない日本での生活や学校生活に適応しながら、学習の成果を示すことが求められています。限られた授業時間で目標を達成するためには、生徒自身が学ぶべきことを把握し目標に向かって見通しを立てたり、振り返ったりして自律的に学習を進めていく必要があります。

慣れない日本で不安や葛藤を抱えながら、自律的な学習にまで向き合っていくことは容易ではありません。また、意欲や能力があっても、日本語の能力が障害となって、適切な学習教材が選べないといった生徒もいます。指導者からの支援なしに生徒が一人で学習を軌道に乗せていくことはかなり難しいことです。

このような生徒に対して、教師は日々の指導の中で、学習項目を教えるだけにとどまらず、生徒自身が自分の力で学習を進めていけるよう、適宜必要な情報を提供したり、助言やサポートを行ったりすることが不可欠です。教師は生徒の置かれている状況を把握した上で、生徒の学習のよき伴走者となることを目指します。

(2) 自律学習の支援

自律学習の支援を行う際は、「学習の見通しを立てる」、「学習を行う」、「学習を振り返る」という3つの段階が循環することを目指します。加えて、「生徒が自分で学習への関心や動機を高められるようになること」、「生徒が自分の学習を観察できるようになること」、「生徒が自分で学習方法を検討できるようになること」、という3点を意識して助言やサポートを行います。

【活動のアイデア】

自律学習の対象となる活動は、日本語の学習教材に限りません。生徒の興味や日本語の能力に合わせて日常生活の中から学びたいものを見付けるなどして、生徒が楽しんで取り組めるよう支援します。

また、母語や母文化をはじめ、複数の言語や文化を経験している生徒の特性を活動に生かすことも考えられます。ここでは、日本語学習につながる自律学習の例を日本語の初級学習者と中級～上級学習者に分けて紹介します。自律学習は生徒の自己学習時間を活用して行うことが前提となりますが、「学習の見通しを立てる段階」、「学習を振り返る段階」に関しては、教師がサポートをしながら進めるとより効果的です。

【 自律学習の例 】

初級学習者向けの学習活動

市販の日本語学習教材（「文章表現のワークブック」等）を用いた学習活動

- ・期間、目標ページ数等を決めて教材に沿って学習を進める。

日本語学習者向けの本（物語等）を用いた学習活動

- ・目標冊数を決めて、読書記録（書名と感想など）をつける／言葉ノート（書名と新しく学んだ言葉や表現、慣用句）を作成する。

駅で使用される漢字を見付ける学習活動

- ・毎日利用する駅等で、新しい漢字を見付けて写真を撮ってくる。生徒のペースに合わせて数を決め、ノートに記録する。

学校や自宅沿線の駅名を調べる学習活動

- ・よく利用する駅等の沿線の駅の漢字とその読み方を調べる。1か月に1路線等目標を決めて図表にまとめる。

コンビニや食品スーパー内の案内表示や食品パッケージを用いた学習活動

- ・店内の案内表示や商品の記載で、分からない言葉や漢字を調べる。生徒のペースに合わせて数を決め、ノート等に言葉や意味を記録する。

母国・母文化等との違いを考える学習活動

- ・学校生活、交通ルール、食べ物といったテーマを決めて、母国等との違いを図表にまとめたり、写真付きのスライドにまとめたりする。

中級～上級学習者向けの学習活動

教科学習に関連する学習活動

- ・内容理解、漢字、語彙といった学習したい項目を決めて、自分のペースで学習を行う。
- ・歴史（時代区分）、日本の地理（県名と場所、特産物）など、学習したい内容を決めて、自分のペースで学習を行う。

好きな漫画や雑誌を用いた学習活動

- ・漫画や雑誌の中から、日本語で好きな言葉や表現、言い回しを見付ける。母語等で同様の言葉や表現を調べる。
- ・母国や世界の漫画や物語などを日本語で紹介するパンフレットやスライドを作成する。
- ・今まで知らなかった漢字や漢字の読み方を見付ける。

インターネット上の投稿写真や動画などを用いた学習活動

- ・好きな言葉や表現、言い回しを見付ける。
- ・新しい漢字（の読み方）を学ぶ。
- ・日本語を用いて写真や動画を投稿する。
- ・SNS等で見付けた母国や世界からの発信を日本語で訳し、紹介するスライドを作成する。

習熟度を問わずできる学習活動

宿題

- ・提出状況を記録する。積み重ねが分かるように表やシールを用いて提出状況を記録する。

小テスト

- ・点数を記録し、ノート等に折れ線グラフを記載する。
- ・テスト実施の際に目標とする点数を設定したり、点数予想を行ったりし、実際の点数とともに記録する。

定期テスト

- ・テスト勉強のスケジュールを作成し、テスト後に振り返る。

いずれの活動も、期間を決めて、目標設定と振り返りを行うと効果的です。基本的には生徒自身が授業時間外で行う活動であるため、教師は進捗状況を適宜確認する必要があります。生徒同士が競い合うことなどが活動の動機付けにつながったり、定期的に学習成果を発表する場を設けると、新たな学びにつながり、自身の学習の進め方や学習方法を見直すきっかけになります。母語や母文化に関連した活動の成果を共有することは、生徒同士の相互理解と多文化への興味・関心が深まるだけでなく、生徒のアイデンティティの再構築にもつながります。

学習記録シートの記入例

わたしの^{がくしゅう きろく}学習記録

クラス _____ 名前 _____

学習の準備

(がくしゅうのじゅんび)

日にち 6月1日～6月30日

目標 (もくひょう)

文章表現ワークブック

10日目(20ページ)～13日目(26ページ)の作文を4つ書く

目標達成 (もくひょうたっせい) の確認方法 (かくにんほうほう)

30日に先生に出す

スケジュール・すすめ方

- ・はじめにぜんぶのテーマを読む
- ・水曜日にモデル文を読んで、日曜日に書く

6月1日～3日 10日目～13日目までの作文テーマを見る

5日 10日目読む・下書き 8日 10日目を書く

12日 11日目読む・下書き 15日 11日目を書く

19日 12日目読む・下書き 22日 12日目を書く

26日 13日目読む・下書き 29日 13日目を書く

30日 月曜の授業で先生に提出

学習中

(がくしゅうちゅう)

メモ (きづいたことを書きましょう)

スケジュールとおなじに勉強できない

振り返り

(ふりかえり)

目標達成 (もくひょうたっせい) ★★★★★

スケジュール ★★☆☆☆☆

うまくいったこと・うまくいかなかったこと・新しく見つけた自分の力など

30日にていしゅつしたが、29日にぜんぶかいた。2時間位でかいた。

スケジュールどおりにできなかった。

書きたいことを箇条書きで書いてから書いたら書きやすかった。

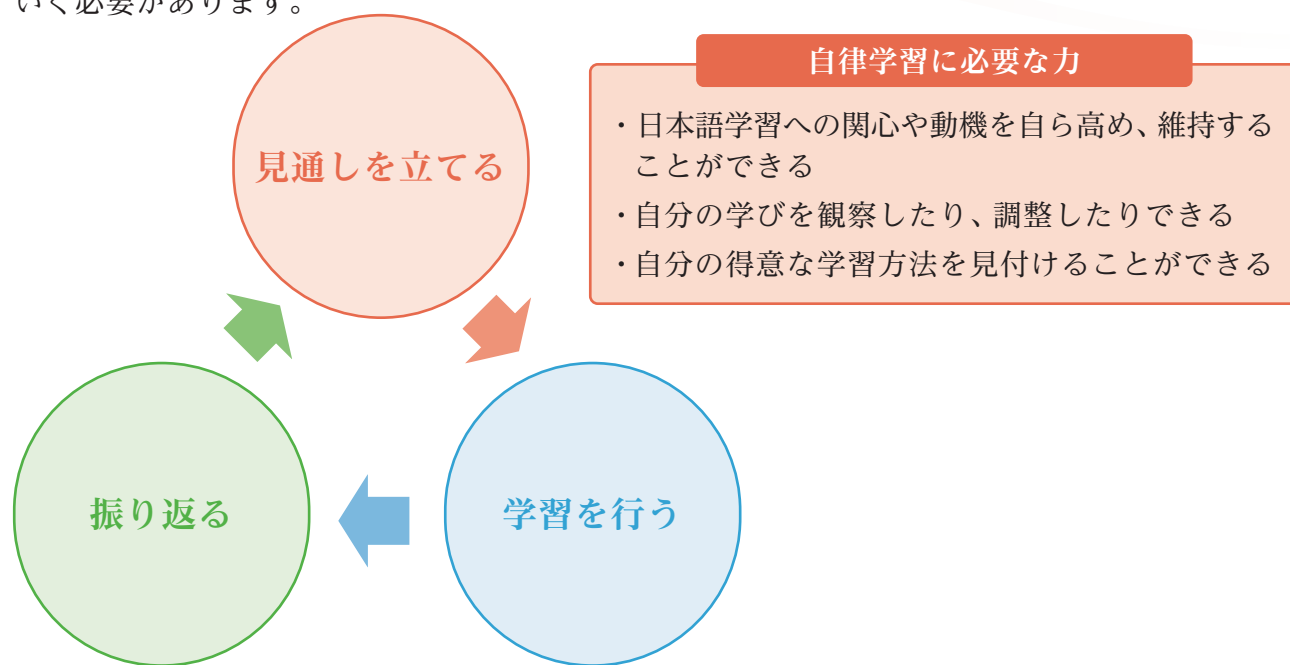
次の目標

14日目～17日目の作文

細かいスケジュールは決めずに1か月に4つ作文を書く

(3) 教師の役割

「見通しを立てる」「学習を行う」「振り返る」の3段階を経て、新たな学習の見通しへつなげるという、学習の循環を生徒自ら生み出せるようになることを意識して、助言やサポートを行います。そして、活動を通して生徒が以下の三つの力を育み、自律した学習者となるよう導いていく必要があります。



自律学習を教師が主導して支援することが重要です。生徒に活動を一任していると、自律学習の力はなかなか伸びていきません。月に一度は、教師とともに振り返り、新しい目標を設定する時間を設けるなど、積極的に介入していく必要があります。

生徒自身が活動に価値を見い出せるよう、あきらめずに工夫を重ね、根気強く活動を継続し習慣化することを目指します。

V 「やさしい日本語」による各教科の指導

1 「やさしい日本語」

「やさしい日本語」とは外国人等にも分かるように配慮して、簡単にした日本語のことを指します。(Ⅲ 5 (1) 参照)

2 リライト教材

「リライト教材」とは、各教科・科目の教科書の内容を当該科目の目標に沿って、「やさしい日本語」に書き換えた教材のことです。中級前半程度の日本語学習を終えた生徒に対しては、教科書のテキストをやさしい表現に書き換えたリライト教材を使用して授業を実施することが考えられます。以下、国語を例にリライト教材を活用した指導を例示します。

3 リライト教材を活用した指導

【国語学習能力の把握】

リライト教材を用いた指導を始める前に、生徒の国語の習熟度を測定する必要があります。そのためのツールとして、「国語学習 Can-do リスト」を用いることができます。このリストは小学校低学年から高等学校までの各学齢において目安となる国語の習熟度を「～できる」という形式で記述したもので、各能力記述文で示された活動ができるかどうか、生徒が自己評価するものです。このリストでは「日本語でできるか」だけではなく「母語でできるか」も併せて自己評価できるようになっています。そのため、母語でも日本語でも習得済みの技能、母語でならできるが日本語ではできないこと、母語でも日本語でも未習得の技能が何かを知ることができます。

上記の情報に基づき、授業中の留意点を明確にした上で、生徒一人一人のもつ知識や思考力を加味した授業の実施を目指します。

【テキストと副教材の準備】

基本的には、当該科目の当該単元で扱う教科書教材をリライトします。

また、学習・指導の助けになる資料を探しておくことも大切です。例えば、小説の場合は、小学生用に既にやさしい日本語に書き換えられたものが市販されていることもあります。世界的に有名な作品の場合は、英語やその他の言語での翻訳版が出版されています。アニメ作品や漫画になっているものや、ウェブ上に公開している学校向け教材も指導に活用することができます。

4 「国語学習 Can-do リスト」を用いた自己評価例

リストの能力記述文(以下、記述文)は全部で48あり、6段階で構成されています(表1)。さらに、「話す」「聞く」「書く」「読む」という技能ごとの分類があり、各技能には「説明的文章」といった下位分類(カテゴリー)が設けられています(表2)。

表1 記述文の6つのレベル

レベル表記	該当する学年
E1	小学校1-2年生(低学年)
E2	小学校3-4年生(中学年)
E3	小学校5-6年生(高学年)
L1	中学校1-2年生
L2	中学校3年生
U	高等学校「現代の国語」「言語文化」

表2 記述文の技能とカテゴリー

技能	カテゴリー
話す	話す、話し合う
聞く	聞く
書く	説明的文章、文学的文章、実用的文章等
読む	説明的文章、文学的文章等、本などから情報を得て活用する活動

生徒は48の設問に「自分がどのくらいできるか」を考えて回答します。回答する際は、日本語でできるか、母語でできるかをそれぞれ、「できる」「むずかしいがなんとかできる」「あまりできない」「できない」という4段階のスケールの中から選択します。

(1) 自己評価結果の見方

図1 生徒の「書く」技能に関する自己評価結果の例

自己評価スケール (4段階)		1:できない	2:あまりできない	3:むずかしいが なんとかできる	4:できる	
レベル	カテゴリー	書く			日本語	母語
E1	説明的文章	学校にある花を見たり、触ったり、においを嗅いだりして分かったことを観察日記に書くことができる			2	4
	文学的文章	物語の「はじめ」と「おわり」の絵を見て、その間に起こった出来事を想像して、出来事の順序やつながりを考えて書くことができる			2	4
	実用的文章	今日したこと、見たこと、聞いたこと、言ったこと、思ったことを日記に書くことができる			3	4
E2	説明的文章	コンビニやスーパーの店員にインタビューをした結果を報告するために、インタビューの目的、仕事内容、分かったこと、それをもとに考えたことを、段落に分けて書くことができる			2	4
	文学的文章	小さい子供のために、登場人物や場面を自分で設定し、「始まり」「事件」「解決」「結末」のような展開を組み立てて、物語を書くことができる			2	4
	実用的文章	学校行事(運動会や音楽会)の案内を地域の人に出すとき、必要な情報を手紙の形式に沿って書くことができる			2	4
E3	説明的文章	「よりよいクラスにするにはどうしたらいいか」について、文章全体の構成に気を付けて、自分の主張、理由、根拠を500字(A4半分)程度で書くことができる			3	4
	文学的文章	自分の「座右の銘」について、その言葉が座右の銘になった理由や経験をそのときの気持ちを交えて500～600字程度(A4半分)で書くことができる			1	4
L1	説明的文章	「コンビニの24時間営業」について賛成・反対どちらかの立場に立ち、根拠となる事実や具体例を示して、600～800字(A4・1枚)で自分の考えを書くことができる			3	4
	文学的文章	ある登場人物の視点から書かれた小説の一部を、別の登場人物の視点に立って、書き換えることができる			1	4
	実用的文章	美術館へ取材の依頼をする際、気持ちや用件が的確に伝わるように電子メールを使って書くことができる			2	4
L2	説明的文章	人気のアニメ作品、もしくは好きな漫画の価値や特性について、データや専門家のコメントといった資料を引用して、600～800字(A4・1枚)で説得力のある批評文を書くことができる			3	3
	文学的文章	修学旅行について、場所別、日付順、心に残った出来事順といった編集の方針を決めて、5～6ページの旅行記を作ることができる			2	4
U	説明的文章	「日本の労働問題」について、国や自治体が公開する統計資料を根拠として、妥当なデータを引用しながら、600～800字(A4・1枚)で自分の意見をレポートに書くことができる			3	3
	文学的文章	学校及び受け入れ先に提出するためのインターンシップ活動報告書を、動機、活動内容、振り返り、将来への展望を含めて作成することができる			3	3

この結果から、以下のことがわかります。

- ・母語では高校レベルまで「3:むずかしいがなんとかできる」と自己評価している
- ・日本語では小学1 - 2年生の活動に関しても「2:あまりできない」と感じている。
- ・「文学的文章」を書くことが苦手のようなのである。

この生徒は母語での自己評価結果から、思考力が学年相当レベルながら、日本語で表現することが障壁となっていると考えられます。生徒の思考を日本語で適切に表現するための支援を中心に行うことが必要だと考えられます。また、文学的文章を苦手と感じる理由も探っていく必要があります。その上で、リライト教材を用いた指導や、「書く」読後活動を充実させると効果的でしょう。

このような生徒に対して、小学生向けの教科書や学習教材を使用して個別指導を行うことは適切とは言えません。高校生でありながら小学生向けの教科書で学習することが生徒の心理面にどのような影響を与えるか、慎重に考える必要があります。日本語ができないことと学年相当の思考力等が身に付いているか否かを同一視しないように留意します。小・中学校の教材を使用する際は、使用する目的を生徒に明確に伝え、同意を得た上で使用するなどの配慮が必要です。

一方、生徒によっては、高校レベルの技能について、母語でも「できない」「あまりできない」と自己評価する場合があります。そのような生徒に対してリライト教材を使用した指導を行う際には、注意が必要です。日本語での表現力の習得だけでなく、同時に高校レベルの思考力等を身に付けなければならず、指導者側が丁寧に学習のステップ作りをして、生徒の様子をよく観察する必要があります。

生徒の国語の習熟度の診断的な使用の他に、記述文の活動を授業に取り入れることも可能であり、生徒の思考力や興味に応じて話題等をアレンジして使用します。年度始めだけではなく年度末にも自己評価を行い、生徒が二つの結果を比較して「できた」という実感を得て国語学習の意欲向上につながることを期待できます。

5 リライト教材を用いた指導の流れ

リライト教材を用いた指導には様々なものがありますが、ここでは現代の国語の「読むこと」として「水の東西」(山崎正和)を扱う単元指導計画例を示します。

例

次	学習活動	指導上の留意点
1	○単元の進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ○これまでの学習や経験を振り返り、欧米とアジア圏の文化の違いについて全体で話し合う。 ○「水の東西」を読み、文章のおおまかな内容について理解する。	・「ししおどし」、「噴水」の動画を見せ、イメージをもたせる。 ・リライト教材やルビ振りの教材を用いて本文を読ませる。 ・ワークシートを用いて内容を確認させる。
2	○原文を音読する ○「水の東西」で使われる文型や表現、文字、語彙等について意味や使い方を理解する。	・ワークシートを用いたり、ペアワークなどをしたりして練習し、理解を深めさせる。
3	○「水の東西」を読み、主張と論拠、文章の構成や論理の展開についてワークシートに記入する。	・前時の学習を踏まえ、文型等に着目し、主張と論拠などに着目させながらワークシートを完成させる。
4	○ワークシートを基に、文章を200字程度で要約する。 ○要約を参考にし、筆者の主張を踏まえながら日本人や日本文化に対する考察を他の地域の文化等と比較しながら300～350字で書く。 ○本単元の学習を振り返る。	・「噴水」と「ししおどし」が比較されているように、母国等の文化と日本文化を比較した文章となるよう、まとめさせる。

読解のポイントは通常の授業と変わらないため、ワークシートや小テストは教科書に準拠した副教材等を表現をやさしくした上で活用します。

一方、以下のようなリライト教材を使う授業特有の注意点もあることに留意します。

リライト教材を用いた指導の注意点

- ・補足説明に時間がかかることを踏まえた指導計画を立てる。
- ・一部分でも良いので、必ず原文を読む時間を設ける。
- ※第2次のように、音読するのもよい。
- ・生徒の負担を考慮し、取組状況に応じて課題の分量を調整する。
- ・リライト教材を用いても読解が難しい場合、文章の一部のみを読ませる。
- ※省略した部分については、簡単な要約を口頭又は文章で教師が伝え、文脈を理解できるようにする。
- ・実際のコミュニケーションを含む言語活動を行う。
- ・テキストの内容学習だけでなく、中級後半以降の日本語指導の内容も含める。

【言語活動】

学習の最後に、実際のコミュニケーションを含む言語活動を行います。例では、第4次の授業で、「筆者の主張を踏まえながら、日本人や日本文化に対する考察を他の地域の文化等と比較しながら300～350字で書く」という活動を行っています。そのような活動を予定しておくことで、生徒がテキストの内容を振り返り、思考を深め、自らの意見を表現する機会となります。また、そのような言語活動があるからこそ、テキストを深く、正確に読もうという動機付けにもなります。

言語活動には、作文の他に、話し合いやスピーチをさせるなど口頭表現につなげる活動もあります。また、生徒の母語を生かし、次年度に入学する後輩のための教科書ガイドを作成するという活動も考えられます。

【リライト教材を用いた中級後半以降の日本語指導】

テキスト内容の学習とともに、中級後半以降の日本語の学習を行います。学習の対象となる文型や表現の種類には様々なものがありますが、まずは、下記の項目例を参考にして、意味の確認や短文作成練習を行います。日本語を母語とする生徒は、幼少期からの読書や学校生活を通して獲得する知識ですが、日本語指導を必要とする生徒にとっては、なじみが薄いものです。

日本語指導項目の例

- ・擬音語・擬態語（「きらきら」「ふっくら」「みんな」）
- ・慣用句（「一から始める」「息をのむ」「目に付く」）
- ・副詞（「ふと」「かえって」「いよいよ」）
- ・接続表現（「ところが」「そこで」）

6 リライトの方法と注意点

書き換える日本語の難易度は、生徒の日本語の習熟度や既存の知識を踏まえて判断します。まずは、下記の点に注意してテキストを見て、書き換えます。

リライトのポイント

- ・漢字にルビを振る。
- ・一文を短くする。
- ・名詞修飾節を省くなど、文の構造を単純にする。
- ・日本語は主語が省略されることが多いので、省略された主語を補う。
- ・登場人物のセリフの中の方言、男性・女性語、古語や古風な言葉は、生徒がよく知る標準的な現代日本語に書き換える。
- ・テキストのキーワードは書き換えず、そのまま使う。
- ・縦書き文章に慣れていない生徒の場合は、横書きにする。

小中学校のテキストと比べ、高校レベルのテキストのリライトは難しい場合があります。キーワードとなる語が抽象的概念を表すものであり、「やさしい日本語」への置き換えができないことがあるため、そうした場合には、無理に置き換えず、概念の説明を丁寧に行います。

また、高校国語の教科書で扱う文章は文化的背景に関する知識が求められる場合も多く、例えば、「ししおどし」「下人」など、日本の生徒もなじみのない言葉に加え、外国出身の生徒の場合、下記の言葉にも説明を要することがあります。そのため、写真、地図、動画などを使って丁寧に説明していきます。

説明を要する言葉の例

- ・時代名（平安時代、明治時代）
- ・歴史的人物（織田信長、徳川家康）
- ・日本の地方や都市の名前、カタカナで書かれた国や都市の名前
- ・動植物の名前（きりぎりす、百合） など

言葉の意味を、「やさしい日本語」、生徒の母語、英語で解説する語彙リストもあると、生徒の読解の助けとなります。作成が難しい場合は、リライトした文章に使われる語の難易度を確認しておき、丁寧に解説します。日本語能力試験準拠のレベル判定サイトなどを活用することも考えられます。

教科書のリライトには非常に時間がかかります。「日本語指導コーディネーター」と教科主任が連携するなど組織的に作業を行います。また、既にあるものをできるだけ活用することも大切です。有名な文学作品の場合は、小学生向けにやさしく書き換えられたものが数多く市販されており、教員によるリライトの代わりとすることもできます。

リライト教材は、「取り出し」授業以外にも、様々な使い方ができます。例えば、「入り込み」指導が必要と判断された生徒や、最初から通常のクラスに入っても大丈夫だと判断された生徒が、予習復習用教材として活用することもできるため、作成したリライト教材を校内で共有し、蓄積していくと便利です。

VI アセスメント

1 目的と種類

アセスメントは、目的に応じて実施します。ここでは、適切な日本語指導に必要な2種類のアセスメントについて述べます。

(1) カリキュラム編成および指導計画立案のための評価(入学前診断・レベル判定)

日本語指導が必要かどうか、どの段階からの日本語指導が適切かを判定するために行う、いわゆるプレースメントテストはアセスメントの一部です。生徒の基礎学力および日本語の能力は多様であるため、まずは、適切な学習のスタート地点を見極めることが肝要です。

クラス編成の基礎資料となると同時に、(2)(3)のアセスメントの基礎となるものであり、十分な情報収集が必要となります。

(アセスメントのための資料等の例)

- a. 筆記試験(プレースメントテスト)
- b. 最も得意な言語による作文
- c. 面接試験
- d. 学習歴等(個人カード)
- e. Can-do statements(2(5)参照)

a. 筆記試験では読み書きの能力を測ります。日本語能力試験N2レベルが高校の授業を理解できるレベルとされていますが、授業を聞いて理解できるかを判断するためには、b. c. で基礎学力を、c. で聞く力を確認しておく必要があります。

b. の実施に当たっては、生徒の母語による作文力を評価できる人材が必要となります。外部の翻訳者に依頼するなど、前もって準備します。

また、日本語の面で支援の必要のない状況であっても、日本での義務教育課程を経していない生徒の場合、高校での学習の前提となる知識等が不十分であることがあるため、b. 及びc. d. 等により基礎学力や学習歴を確認し、必要となる支援を把握・共有しておくことが大切です。併せて、e. の活用も検討します。

(2) 指導計画および学習についてのアセスメント

学習開始後、個別の指導計画や日本語の学習が生徒に合っているかを確認する目的で適宜実施します。日本語指導のレベルが高すぎても低すぎても、生徒の学習意欲を損なうおそれがあり、また、各教科・科目の評価・評定にも影響を与えることとなります。日本語指導が生徒に合っていない場合や計画どおりに進んでいない場合は、速やかに指導計画の見直しに着手します。

(アセスメントのための資料等の例)

- f. 日々の小テスト・提出物
- g. 授業での様子・振り返り
- h. 定期考査

日々の学習状況については、学校全体で共有することが大切です。着実に伸びているという情報を共有することは、教員が生徒を肯定的に捉える土台となります。また、各教科・科目の指導において、どのような支援が必要か、また、可能かを見極めます。

2 入学前診断・習熟度判定の方法

日本語指導の必要性を見極め、適切な指導計画を立案するための入学前及び直後のアセスメントについては、次のような実施方法や観点が考えられます。

(1) 実施前の準備

スケジュールの確認

実施可能な日程と時間帯を確認の上、予定を立てる
筆記試験及び作文／面接の実施に十分な時間を確保する

通知

生徒・保護者への通知 + 学校内での情報共有

会場及び機材の準備

実施会場の確保（筆記試験会場・面接会場）
機材の準備（ICレコーダー・筆記用具等）

試験問題／課題／資料作成と印刷

a. 筆記試験問題、b. 作文課題、面接質問票を作成する
上記資料および評価シートを、受験する生徒の人数分、印刷する

(2) 試験問題・課題作成のヒント

a. 筆記試験

日本語の習熟度を判定する規準となるものです。

実施時間に合わせ、「高校生のための日本語実力テスト」や市販のレベル別試験問題等を活用します。

b. 作文

生徒の母語等最も得意な言語で書かせることで、教科の学習に必要な基礎力を把握します。日本語で書ける生徒には日本語で書かせることも考えられます。作文シートには、メモやアウトラインを書く欄も設けておきます。監督者は、前後の構想段階や推敲などの様子を観察・記録し、生徒の思考力、判断力、表現力等を把握するための資料とします。

（課題例）

「多様性 diversity」について、言葉の意味、具体的な例、あなたの考えを書きなさい

c. 面接

全員に確認したい事項について具体的な質問をリスト化した「面接質問票」を準備します（質問事項の中に、高校生活に期待すること、将来の希望等を用意しておくとい）。またリスト作成の際、「生徒カード」等を参照し、記載のない事項や、個別に質問すべきことがあれば質問項目として挙げておきます。「面接質問票」は箇条書きではなく、具体的な発話（文）の形で作成します。日本語習熟度を測るため、一般的な日本語による質問文と「やさしい日本語」に言い換えたもの、英語訳の3種を用意することが望まれます。

(質問例)

- ・一般的な日本語 「将来の夢は何ですか。」
- 「やさしい日本語」 「どんな仕事をしたいですか。」
- 英訳 “What is your future dream?”

「話す力」・「聞く力」のほか、各教科で学習する語彙^いの習得状況を確認するため、「課題シート」を準備します(図表と200～400字程度の説明文)。

(課題例)

SDGsパンフレット(日本語版・ふりがな付き日本語版・英語版)

(3) 実施方法

筆記試験は全員同時時間帯に実施することが望めます。

作文は、筆記試験と組み合わせたり面接と組み合わせたりしながら時間の工夫をします。面接はICレコーダーなどに記録します。

面接の手順**①導入**

- ・名前の呼び方の確認など

②質疑応答

- ・「面接質問票」に沿って質疑応答を行う。
一般的な日本語による質問が理解できない場合は、「やさしい日本語」で言い換える。それでも理解できない場合は英語に切り換える。

③資料の音読・内容についての質疑

- ・指示は日本語で行い、指示が理解できているかどうかを判定する。
- ・音読の様子から、日本語の理解度を判定する。
はじめにルビなしの資料を渡し、漢字の読みなどに困難が見られる場合は、ルビ付きの資料に差し替える。
- ・説明の内容から、話の内容を構成する力及び教科の学習に必要な基礎力を判定する。
日本語の資料が全く読めない場合は、英語版に変えて実施し、説明も英語(または母語)でさせてもよい。

(4) 採点

複数の教員が採点やアセスメントに当たる可能性が高いため、あらかじめ模範解答、ループリック等を準備しておきます。

採点の結果に基づき、複数の教員で検討を行い、支援の必要性や内容を判断するアセスメントを行います。

a. 筆記試験

用意した模範解答を基に採点します。

採点基準をできるだけ詳細に決めて、解答用紙に明記しておきます。

例1) 漢字テストの採点基準例

- ・読み問題は各2点で完全解答。但し、ひらがなの表記間違いは減点とし、1点与える。
- ・書き問題は各2点。送り仮名の間違いは減点とし、1点与える。

※とめ、はね、はらいは厳密に採点しない。画数が正しく、漢字の形が著しく崩れていなければよいものとする。

例2) 文法テスト(記述あり)の採点基準例

問： から言葉を一つ選んで、正しい形にして、文を完成させましょう。(各5点)

作る	読む	聞く	書く
----	----	----	----

1) 最近はずを見るのをいやがって、新聞や本を____うともしない人が増えているそうだ。

- ・語彙選択の間違い(「読む」以外を選択)→0点
- ・語彙選択は正しいが、変換が間違っている(「読も」ではない)→2点

例3) 読解テストの採点基準例

問：どうして、昔から「外見より中身」と言われてきたのですか。(5点)

解答例：①いくら外見が良くても、中身がなければ何にもならない②からです。

- ・本文から正しく内容を読み取っている(①)→3点
- ・問いに対して正しい形(～から、～ため等)で答えている(②)→2点
- ・細かい日本語の語彙や文法のミス→全体で1点減点

b. 作文

まず、課題や指示を正しく理解しているか（課題例の場合、言葉の定義・具体例・自分の考えの3点が書けているか）を判定します。その上で、内容の量と質について検討します。

母語で作文を書いた生徒がいる場合、母語話者に評価の観点を伝えて評価してもらうと同時に、翻訳（できるだけ逐語訳）を依頼します。翻訳前であっても、ある程度の分量が書けているか、段落があるか等、外形的な評価により、基礎学力の一つである作文力を判定することができます。

作文採点基準の例

No.	評価項目	項目の説明
1	内容の豊かさと適切性	情報の質が高い 情報の量が適切
2	表現の豊かさと適切性	読み手に配慮ができる 表現に工夫がある
3	文章構成	適切な意味段落が作れる 段落構成・文章の流れがよい
4	文の質（文法）	書き言葉で文法的に正しい文が書ける 複雑な構造の文が書ける
5	文字（漢字）	常用漢字表の漢字が適切に使える ひらがな・カタカナ・漢字の使い分けができる
6	語彙 ^い の豊かさと適切性	語彙 ^い が豊富 語彙 ^い の使い方が適切
7	取り組み姿勢	書く前によく考える 書く前にメモ・やアウトラインを作る 書いた後に読み直し、修正ができる

※各項目を5段階評価する

5：とてもよい、4：よい、3：ふつう、2：もう少し、1：未提出

c. 面接

実施前に、把握したい力の観点別に評価の指標を定めます。次の「評価指標の例」はその一例であり、「A. 聞く力」は、授業を聞いて理解できるか、「B. 話す力」は、意思の疎通ができるか、「C. 読む（音読する）力・漢字語彙力」は、教科書や資料が理解できるかといった、日本語の力を計る指標となっています。一方、「D. 教科の学習に必要な基礎力・話の内容を構成する力」については、母語等で培われてきた基礎力を推測するためのものであるため、日本語では難しい場合は、後半の資料を英語に切り換え、生徒による説明が英語で行われた場合にも指標とします。

実施の際は、評価指標をあらかじめ人数分印刷しておき、あてはまる記述に○を付けるなど、観点別に判定を行います。

評価指標の例 ※評価指標の例は、「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」のステージを指すものではない。

	A. 聞く力	B. 話す力	C. 読む (音読する力)・ 漢字語彙力	D. 教科の学習に必要な 基礎力・話の内容を 構成する力
ステージ 6	質問や指示を一度で正しく理解できる	発音、語彙、文法などに大きな問題がなく、十分に意思の疎通ができる	すらすらと、意味を理解して読んでいる	提示された課題についてまとまった話ができると同時に要点を押さえ、具体例を交えて詳しく説明ができる
ステージ 5	質問や指示が一度で理解できない場合に自らの判断で聞き返すなどし、質問や指示の繰り返し・言い換えがあれば理解できる	発音、語彙、文法などに多少の間違ひがあるが、意思の疎通には問題がない	漢字の読み方など、部分的にはひっかかる箇所があるが、全体的には意味を理解して読んでいる	提示された課題について、いくつかのキーワードが使える程度まとまった説明ができる
ステージ 4	質問や指示が一度で理解できない場合に自らの判断で聞き返すなどし、質問や指示の繰り返し・言い換えがあっても理解が不十分である	発音、語彙、文法などに多少の間違ひがあるが、意思の疎通が難しい面がある	流暢ではなく、時折ひっかかりながらではあるが、ある程度意味を理解しながら読んでいる	提示された課題について、ある程度の量が話せるが、まとまりを欠く、あるいは、部分的な説明にとどまっている
ステージ 3	質問や指示の理解が不正確なまま答えようとする	発音、文法などに間違ひが多く、語彙が限られているため、意思の疎通が難しい	流暢ではなく、頻繁にひっかかりながら読んでおり、部分的にしか意味が理解できていない	提示された課題について説明しようとするが内容が部分的に誤っている、もしくは、内容的なまとまりが見られない
ステージ 2	簡単な質問であれば理解できる	日本語の発話量が少なく、限られたやりとりのみ可能	ところどころ読める部分があるが、文の意味は理解できていない	提示された課題について説明しようとするが内容が大部分誤っている、もしくは、話す量が少ない
ステージ 1	質問や指示がほとんど理解できない	ほとんど話せない	ほとんど読めない	提示された課題が理解できず、ほとんど何も話せない

上記の評価指標例で、ステージ1～4の生徒に対しては、支援や指導が必要です。特に、筆記試験でN2レベルであっても、「A. 聞く力」がステージ4以下の場合、通常の授業に参加することは困難であることが想定されます。また、「C. 読む(音読する)力・漢字語彙力」と「D. 教科の学習に必要な基礎力・話の内容を構成する力」の判定結果を見比べ、日本語の支援があれば各教科の学習が可能であるのか、各教科の学習の内容そのものについても支援が必要であるのかについての見極めを行います。日本語が習得途上であっても、「D. 教科の学習に必要な基礎力・話の内容を構成する力」が高い場合は、支援開始後の伸びが早いことが期待できます。

(5) Can-do statementsの活用方法

Can-do statementsとは、弁別的な知識を問うペーパーテストではなく、言語を使ってどんなことができるかについて、チェックリストを使って、本人が自己診断するものです。日本語の習熟度を測ることや、教科の力を測る指標としても使うことができます。

このCan-do statementsのチェックを行うことによる意義は、以下の5点です。

- ①生徒が、自分自身の日本語力を客観視することができる。
- ②生徒が、リストの項目により、求められる力を知り、目標とすることができる。
- ③定期的にチェックを行うことで、生徒・教員双方が伸びを確認することができる。
- ④教員が、生徒の伸びを把握することで、指導計画に生かすことができる。
- ⑤データの蓄積により、それぞれの学校において、支援・指導の目安を作ることが可能になる。

国際交流基金のみんなのCan-doサイトに、日本語の習熟度把握の目安となるJFスタンダードと、日本語のコミュニケーション言語活動552項目を扱うJF can-do、そしてJF can-doを目的に合わせてカスタマイズする方法が紹介されています。カスタマイズ例として、「日本語can-doリスト」(以下「日本語Can-do」という。)を作成しました。これは、JF can-doから抜粋する際、ビジネス場面等、高校生に合わないものを除いたもので、主にコミュニケーション能力を診断するのに用います。

「日本語can-do」には、英語、中国語、ネパール語、フィリピン語(タガログ語)、アラビア語及びポルトガル語の翻訳版があり、これらの多言語版を用いることにより、生徒の母語又は理解可能な言語により自己診断ができるようになっています。チェックの際は、「～することができる」という項目に対して、「1できない・2あまりできない・3なんとかできる・4できる」という4段階で自己評価します。これを、プレイスメントテストの一部として使用することも可能です。使用する場合の「実施概要」と生徒への「結果返却見本」も作成しました。

第5章で紹介したように、国語Can-doを母語でできるかどうかと日本語でできるかどうか両方でチェックすることで、生徒に合った支援と指導を見極め、授業を設計することができます。

3 評価・評定

(1) 「取り出し」授業の評価

「取り出し」授業は、あくまで教科の授業となるので、各教科・科目の目標に合わせて観点別学習状況の評価を行います。その上で、評価の総括として5段階などで評定をつけていきます。オリエンテーション等で、成績の付け方について十分に説明をし、指導と評価の一体化を図る必要があります。課題への取組姿勢や提出物が成績に反映されることを生徒によく理解させることが不可欠です。

(2) 学校設定教科・科目としての日本語の評価

当該授業の目標や、高校全体の授業の中での位置付けを考慮し、日本語の授業担当者と相談の上で決定し、上記(1)と同様、生徒に対しては授業開始時に丁寧に説明を行います。日々の課題への取組を評価することは、多様な文化背景のある生徒に自律的な学習を習慣化させる上で重要な役割を果たします。

4 その他の留意点

(1) 生徒の学習言語能力への理解と共有

日常会話ができることと、高校の授業で学べることとの間には大きな開きがあります。日本語で学べるようになるには、時間がかかることをまず理解する必要があります。学齢期相応の学習言語能力の習得には、支援開始から最低5年を要するとされています。しかし、日本語の学習言語能力が十分に育つまで教科学習等を待つことはできません。生徒の持つ母語力・英語力等、全てのリソースを活用しつつ、日本語で学べることを増やしていくことが求められます。また、日本語を母語としないJSL生徒は、単に日本語の語彙力が不足しているというよりも、小中学校の授業で身に付ける知識が不十分である場合もあります。

日本語指導においては、日本語指導担当者以外の教員も、当該生徒の日本語の能力や知識がどのように伸びていくのか、どのような支援が必要かを把握しておくことが大切であり、学校全体で共有します。

また、日本語支援においては、何よりも、生徒が自ら学ぶ力を伸ばすことが肝要です。評価の仕方を工夫することによって、学習の仕方や取組姿勢の支援につなげていく必要があります。

(2) 評価の活用

各教科の授業において実施される評価は、日本語支援が適切に行われているかというプログラム評価としても重要です。

また、生徒の学習状況について授業担当者以外と情報の共有を行うことは、学校全体での支援を円滑にするため不可欠です。